

1930年代のフランスにおける写真の位相

— グラフィックアート誌『アール・ゼ・メティエ・グラフィック』を中心に —

いそたに ゆうすけ

磯谷 有亮 (大阪大学)

発表要旨

17時5分 | 17時45分

松ヶ崎・東キャンパス内 60周年記念館 1F記念ホール

グラフィックアート誌、『アール・ゼ・メティエ・グラフィック(1927-1939、以下AMG)』は両世界大戦間期のフランス写真界を牽引した雑誌である。とりわけ1930年刊行の写真特集号『フォトグラフィ』はラースロー・モホイ＝ナジらに代表されるモダニズム写真の動向をまとめてフランスに紹介した初の写真集である。1939年まで年刊で継続した同書は同時期のフランスにおける写真の変遷を如実に反映している。本発表では『フォトグラフィ』が1930年代半ばに保守化の傾向を強めたことに着目し、その変化を写真のマスメディアからの分離と芸術分野としての自律化という視点から考察する。

1930年代前半の同写真集は機械や工業製品等の近代的な主題や極端な仰俯角や接写に代表される実験的な手法を用いた写真を多数掲載した。ところが1934年号の出版を境にモダニズムは、伝統的な風景・静物・肖像等の主題に基づき、均整の取れた構図を持つフランスの芸術伝統に根ざした審美的な写真動向に取って代わられる。この変化は当時の「秩序への回帰」の美学と、政治・経済情勢の悪化の下で高まるナショナリズムと排外主義の発露として理解されてきた。モダニズム写真は主に外国人写真家によってフランスにもたらされた。伝統への回帰はその反動であり、「フランス様式」の写真の出現として理解されてきたのである。

しかし『AMG』と関連出版物および同時代の批評を網羅的に分析すると、モダニズムの批判が政治・社会的な要因だけでなく、マスメディアにおける写真の氾濫に対する批判と密接に結びついていたことが明らかになる。戦間期の写真の近代化は写真単独の現象ではなく、グラフ雑誌や広告等のマスメディアの発展と不可分だった。ところがこうした媒体で用いられる写真は次第に新奇さのみを求めるようになり、モダニズムの手法は人目を引くための安易な常套句として批判されるようになる。審美的な写真動向の高まりはこうしたモダニズムの濫用に伴う写真の質の低下への反動だったのである。

この変化は写真を自律した芸術分野として再定義する動きとも連動していた。『フォトグラフィ』の保守化と前後して『AMG』はメディアとして用いられる写真と、作品として鑑賞されるべき写真を編集区分上分離させただけでなく、19世紀以来の芸術写真の振興を担った保守的な組織、フランス写真協会との結びつきを強めていった。伝統的な主題や画面構成の手法への回帰は、写真の芸術作品としての価値を担保するための手段として機能していたのである。

ヴァルター・ベンヤミンの1936年の論考が示すように、戦間期写真の発展は因襲的な芸術制度からの写真の訣別と、メディアとしての再定義を中心に語られてきた。フランスにおいて見られた写真をメディアの文脈から切り離し、芸術の枠組の中に再び位置づけようとするこの動きは、従来の戦間期写真史の根幹をなす語りに逆行するものであり、その図式の再考を促す重要な事例を提供する。